

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ23】

松崎・JR革マル派のガードマンと墮した初代柴田善憲監査役以下多数の警察出身者
柴田氏は、松崎氏の“発言”情報どおり、多額の交際費を使って、かつての部下を高級料亭等に招待し、「車で送る」等のことをしているため、松崎氏や革マル派との関係を知らない現役警察官僚たちは、「あの人は素晴らしい人だ」などと称賛する者も少なくないようである。

柴田氏自身が仲入した警察官で、オウム真理教の麻原逮捕の写真を週刊誌に流したとして処分を受けた公安出身の人物を、一年早く退職させ、JR東日本の副課長で採用し、本来警視庁では発行しない「通行証」を発行しているとの噂など、柴田氏と親交の深い警察関係者のいろいろな話などについては紙数の都合もあるので別の機会にしたいと思う。

ともあれ、正・続『もう一つの「未完の国鉄改革」』で筆者が繰り返し記述したとおり、漆間巖・現警察庁長官、奥村万寿雄・現警視総監を含む歴代の警察庁警備局長が、国会答弁で「JR東労組内部に革マル派が相当浸透」と警告を発し、政府もまたその“事実”を「公文書で認識」（平成15年3月18日『内閣参質156第3号』）しているという現状の中で、あたかも「松崎氏及びJR革マル派のガードマン」に成り下がったかの如き奇っ怪至極な柴田善憲氏らキャリア警察官僚たちの反権力・反社会的動き、日本警察の信用を失墜させる危険な言動が何故許され、放置されているのか、筆者には理解不能である。いわゆる「失われた10年（＝日本警察の革マル派対策の失敗）」（川邊克朗『日本の警察』）の過ちを再び繰り返してはならない。警察の自浄能力の発揮、警察上層部による政治や既得権益に左右されない真に公正・適切な人事運用を切に期待するものだ。

今にして思えばだが、これまで縷々述べてきた内容と深い相関関係があることを感じさせる国鉄改革当時の「松崎発言」がある。1985年6月30日、松崎氏の動力車労組中央本部執行委員長就任に際して行われた記者会見の場で、同氏と労働記者との間で次の質疑応答があった。

【質問 尊敬する人物は誰ですか。

松崎 これは笑われるかも知れませんが、最近、秦野章さんの『何が権力か』という本を読みまして、その中に「マスコミこそ第二の権力だ」と書いてありました。まったく同感でありまして、日大の夜間部を卒業したそうですが、感性の鋭さを感じております。…】（松崎 明著『国鉄改革』上巻 p,93）

松崎氏は、続けてプロ野球の王貞治選手と「サンデー兆治」こと村田投手の名を挙げているのだが、いずれにせよ松崎氏はこの時点で既に、尊敬する三人の人物の筆頭に秦野章氏の名を出しているのだ。他の二人は当時人気絶頂のプロ野球選手である。元警視総監秦野章氏はさぞかし気分が良かったことだろう。

たまたま、この箇所を執筆中の折しも産経新聞連載の「凜として」（題書は、横田早紀江さん）欄に、かつて過激派の小包爆弾事件で奥様を亡くされた土田国保元警視総監の、古武士の生き方を凜として貫き通したその生涯が数回に亘って綴られ、読む毎に感動し、最終回を読み終わって深い感銘を受けた。

警察内部の評価はどうか知らないが、筆者の独断では、警察キャリア官僚として、志の高さとその生きざまにおいて後藤田正晴元警察庁長官（後、中曽根内閣官房長官）よりも土田国保元警視総監が遙かに立派な人物であったように思える。ましてや柴田善憲氏など、その生き様があまりにも卑小で、同じ警察キャリア組でありながら“志”に差がありすぎ、比較する気にもなれない。

「革マル派対策10年の空白」、革マル派による「皇室警衛無線をも含む警察無線の傍受」、「JR総連・東労組への革マル派浸透の深度化」など、考え併せるとき、キャリアの風上にも置けない柴田善憲氏は、罪・万死に値するだろう。「恥を知れ！」と言いたい。

また、柴田善憲氏以下歴代の警察キャリア出身のJR東日本監査役と、その人々に随従、JR東日本で第二の人生を送った多数の警察出身者たち、さらに、今でもこのような人物と飲食を共にしている現職の警察官僚たちは、「JR総連・東労組内に革マル派が相当浸透」の事実に対し、一体どのように対応してきたのが、今後、厳しく問われなければならないだろう。

< JR東日本労政『二十年目の検証』170ページから171ページより抜粋 >

民主化の声・声・声・・・

2005.11.29

その23

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (3)

～月刊誌『自然と人間』を通じた党革マルとの関係?～



* 「暮れの合意はどうしたのか。良い労働者党员というが、鉄道連合に攻撃をかけてきている組織のメンバーに違いはない。それと共同経営をするなど組織として議論も意思統一したこともない。現在でも鉄道連合は労働者党に組織攻撃をかけられているではないか。彼らの言っている内容についての提言は納得できる点もある。それは具体的に判断していけばいい。くり返すが、彼らと共同経営するのは反対だ。どうしてもというのなら、組織の意思統一をはかるのが前提だ」

鈴木が発言が終わらないうちに軽部委員長が口をはさんだ。「鈴木さん。言っておきますが、これは組織で決めたのですよ。組織が...意味は分かるでしょう」出席者は顔を見合わせて沈黙した。敵対している労働者党のメンバーと共同経営するなどという重大な方針を、決められるのは大元以外にはいない。まして、暮れに大元がまとめた内容と異なる案を出せるのは、大元本人以外の誰もできないと知っていたからである。

労働研究所の今後の方針をめぐる会議は、その後何回か開かれた。「労働者党メンバーと共同経営のあとは共同戦線か。俺は絶対に認められない」鈴木がそう主張すればするほど場はしらけた。すでに代表とは名ばかりになっていた。「いつまでそんなことを言っているのか。代表だけが足を引っ張っている。これでは少しも前にすすまないではないか」川下書記長の意見に出席者全員が深くうなずいた。鈴木の見解は無視され、大元の指示のもとに、労働研究所の新たな構想はどしどし進められていった。(p. 14 ~ 15)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【鈴木(F氏)が『良い労働者党员(党革マル派メンバー)といっても、鉄道連合(JR総連)に攻撃をかけてきている組織のメンバーに違いはない。彼らの提言は納得できる点もあるが、組織の意思統一を図るのが前提だ』と言うと、鉄道連合の委員長が『鈴木さん、これは組織で決めたのですよ。組織が...意味はわかるでしょう』敵対している労働者党のメンバー(党革マル派メンバー)と共同経営するなどという重大な方針を決められるのは大元(M氏)以外にはいない】

このころ、JR総連OBの坂入さんが革マル派によって拉致されたという事件も発生しており、JR総連と革マル派が対立していたことは事実である。

民主化の声・声・声・・・

(続く)